



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	平岡昭利『アホウドリと「帝国」日本の拡大：南洋の島々への進出から侵略へ』
Author(s)	渡辺, 敦子
Citation	境界研究, 4, 117-122
Issue Date	2013-11-29
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.4.117
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61176
Type	departmental bulletin paper
File Information	07Watanabe.pdf



[書評]

平岡昭利『アホウドリと「帝国」日本の拡大： 南洋の島々への進出から侵略へ』*

渡辺 敦子

はじめに

八丈島から南西に1,200キロ、沖縄本島からは東に360キロ離れた地点にある大東諸島は、隆起サンゴ礁の島で周囲を断崖絶壁に囲まれている。1900年に八丈島から入植者があり、サトウキビの大規模プランテーション経営が行われた。かつては軽便鉄道も存在したという。なぜ人々は、絶海の孤島の崖をわざわざよじ登ったのか。平凡だが正面から取り組む人は稀であろう問いに、人間の「行為」の意味解明に着目し挑んだのが本書である。一見非合理的な入植者の行為は、欧米に輸出すれば莫大な利益を生むアホウドリに誘われたもので、実は帝国日本拡大の原点であったという。本稿では、批判的政治地理学の視点から同書の論考を試みる。

1. 視点をめぐる二つの問いと海

本書の考察に入る前に、近代日本の海洋をめぐる政治地理的展開に欠かせないであろう二つの問いを提示したい。第一に、日本は極東に位置するのか、あるいは極西か。国際政治学者の高坂正堯は著書『海洋国家日本の構想』で、「ある外人記者」に、日本は東洋の端ではなく西洋の端にある国ではないかと問われた経験を紹介、実際の地理にもかかわらず、西洋と「同じ政治、経済体制を持つ」日本は、海を隔てた「飛び離れた西」だと論じる⁽¹⁾。高坂の議論は確かに、妥当に聞こえる。にもかかわらず、たとえば米軍の関係者向け放送であるAmerican Forces Networkの日本周辺向けサービスは、1997年まではFar East Networkと呼ばれていた。このことが象徴的に示すように、少なくとも冷戦期までは、日本は実際には「東」と定義されてきた。

ここで筆者が問題にしたいのは東西の区別ではなく、その規定において重要な役割を果たしているのが海である、という点である。日本は大陸の東の端にあり、太平洋はあくまで巨大な空白、境界と認識されている。あるいは視点を地球の裏側までめぐらせれば、大西洋が

* 平岡昭利『アホウドリと「帝国」日本の拡大：南洋の島々への進出から侵略へ』明石書店、2012年。

(1) 高坂正堯『海洋国家日本の構想』中央公論新社、2008年（初版1965年）、175-182頁。

欧州と米国をつなぐものであるのに対し、太平洋は同じ海でも分断されたそれである。ここで想像される地図は、太平洋を中心にした日本製の世界地図ではなく、米国や欧州で目にする、大西洋中心のそれであろう。

二つ目は、より普遍的な問いである。地理は人間の限界を示すのか、それとも可能性であるのか。これは本書が扱う時代には、より重さを持つ問いかけであったはずだ。高山岩男は論文「歴史の地理性と地理の歴史性」で、「近代世界史の驚嘆すべき事件」は「自然的封鎖性を人為的自発的に打破し、地域的多元性を漸次一元的に連絡し始めた」ことだとしつつ、世界の構造の行き着いた先はしかし、「異質的なものの補足的統一」であったと指摘する。地理的特殊性はつまり、高山によれば世界史に必然的な要素だが、ラッツェル(Friedrich Ratzel)の地理的決定論は「精神的歴史性」を逸し、人間の主体性を認めていない。自然条件は確かに人間の行動を制限するが、歴史的現実にはむしろ、「精神の自発性」がその与えられた基盤をいかに利用するかにより形作られる。つまり自然は、人間の行動を決定するものではなく「可能条件」に過ぎず、一方で主体性はその可能性の内にあるとはいえ、「流動的であり個性的」である⁽²⁾。

高山にとり日本を形作る最大の「可能条件」は、海であった。ただしその海の向こうにあるのは、やはりアジア大陸であったようだ。高山は言う。アジア大陸の東端にある島国日本にとり、海は常に「連絡と遮断」、「解放と封鎖」といった相反作用を「同時にしかも自然な仕方」で持ち、文化を形作ってきた。高山と同様に京都学派の論客として知られる三木清もまた、「国民性の改造」と題された『中央公論』誌上の座談会で、文化は大陸から興ったとし、日本文化の更なる発展のためには、明治以降の海洋文化的性質を脱却し「大陸性を獲得」する必要があると述べている⁽³⁾。戦前の思想界における彼らの影響力はここで強調する必要もなからう。だがいずれにせよ戦前のある時期から敗戦を通しておそらくごく最近まで、少々乱暴に言えば日本人の視線は圧倒的に極東から大陸を見つめ、太平洋はむしろ空白、つまり世界から隔てるものでこそあれつなぐものとは認識されていなかった。そして高山のいう地理的可能性は、大陸につながる海にこそ見いだされるものであった。

視点は、人の行動のあり方を左右する。オトウホールは地理を所与のものではなく、知一権力の関係であると定義し、「慣行化されたものの見方と示し方」への注意を喚起する。大航海時代を経て西欧が手にしたのは、隅々まで探検され尽くした「閉じた空間」としての地球、そしてその閉じた世界を自分から切り離された「劇場」として捉える「デカルト的視点」であった。彼は、この視点が西欧にとっての「新たな地理」を作り出したと主張する⁽⁴⁾。である

(2) 高山岩男「歴史の地理性と地理の歴史性」『思想』221号、1940年、1-62頁。原文は旧仮名遣いだが、ここでは現代仮名遣いに改めて引用している。

(3) 「検討会 国民性の改造」『中央公論』55巻11号、1940年、212-233頁。

(4) Gearóid Ó Tuathail, *Critical Geopolitics: The Politics of Writing Global Space* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1996).

ならば、ラッツェルの地理的決定論に対し可能条件の中での人間の主体性を見いだそうとした高山の主張は、西欧の「慣行化された見方」への反駁と解釈できなくもない。だがそれは同時に、歴史が示すとおり不可避免的に西欧の視点に対峙することでもあった。

2. 東洋、西洋、そして南洋

平岡の旅は、九州からちょうど真南に下りたあたりにある太平洋の孤島・南大東島から始まる。本書執筆時から約40年前、修士論文のために大東諸島を訪れた平岡は、人々が絶海の孤島に移住したのは本当に農業のためだけだったのか、という本質的な問いを抱く。島の古老らの回答は彼の疑問を否定するものであったにもかかわらず、十数年を経て調査を再開、限られた文献を丹念に調べあげる。その結果、同島を開拓した玉置半右衛門の当初の目的は、欧米に輸出すれば巨利を得ることができるアホウドリの捕獲であったことを突き止める。小笠原諸島の鳥島に始まる玉置の事業は、成功物語としてマスコミに取り上げられ、南洋開拓ブームの火付け役となった。人々は次々と太平洋へと乗り出し、その結果「わが国における大航海時代」が出現、「帝国」日本の拡大につながった——というのが、平岡の主張である。

それは一見、戦前戦後には空白であった太平洋を舞台に、地理的可能性に挑戦した日本人の主体性の物語のようである。だが平岡に導かれてその拡大の軌跡を追うと、ひとつの疑問に突き当たる。南洋とはそもそも、どこを指すのであろうか。

平岡によると、アホウドリの捕獲と欧米への輸出は、既に1885年ごろには始まっていたという。玉置は島の捕獲を目的に鳥島を開拓、巨利を得る。その過程で志賀重昂ら「南進論」者と知り合い、側面支援を受ける。玉置の成功に刺激され、人々は大海に乗り出す。そのうちのひとり水谷新六は、小笠原の東南に位置する南鳥島を発見。一方で鳥島のアホウドリを捕獲し尽くした玉置は、南大東島へと向かう。また別の探検者は日本の領土に一旦編入されながら結局幻の島で終わる中ノ鳥島を“発見”する。さらに世紀の変わるころにはミッドウェー諸島、北西ハワイ諸島へと、日本人の行動範囲は東へと広がってゆく。

一方で、その航路は西にも向かう。1880年代の終わりには、アホウドリやヤコウガイを求めて人々は尖閣諸島に進出。さらに日清戦争を経て台湾が日本の領土となると、その北部の無人島群、ついに香港の南東330キロの東沙諸島へとたどり着く。また南へはニューギニアに近いアンガウル島、カロリン諸島へと広がりを見せ、確かに日本列島以南であるには違いないものの、「南洋」は、東西に相当広い地域を網羅している。

矢野暢は著書『「南進」の系譜』で、南進論を「日本と南洋との結びつきを必然化してみせるイデオロギー」と定義する。矢野によれば、明治期の所産である南進論は思想的には多様であるが、共通点としては日本人の海外進出先として最もふさわしい地域として南洋をとりあげ、実際には大陸も含むものの比喩的には海を示し、西洋のかかわりを否定し、南の後進性

を強調し、それを開発するのは日本の使命だと説いているという。つまり南洋とは最大公約数的には、西洋でも東洋でもない日本にとってのフロンティアであった⁽⁵⁾。そうであれば、オトゥーホールに倣えば南洋とは、平岡の言う「わが国の大航海時代」を経て形成された、日本にとっての「慣行化されたものの見方と示し方」を伴った「閉じた空間」だったと言えるはしないか。つまり南洋とは、明治から昭和にかけつくり出された、日本人のための「新たな地理」だったのである。

3. 可能条件と隠された事実

では日本人は、自らの「可能条件」であった想像上の海で、どう自己の行動を規定し、それはどのように高山の時代に顕著となった、西洋に対峙する帝国日本の視点へとつながっていたのだろうか。平岡の実証的な手法は、この点でも興味深い事実を浮き彫りにしている。

平岡が資料収集に苦勞したのは、アホウドリと南洋のつながりが隠された事実であったからだ。明治期、日本は年間数百万羽のアホウドリを捕獲しフランスなどに輸出を開始した。だが、平岡によれば、それは実は「日本人自身が記憶に残したくない事柄」であった(8頁)。たとえば玉置が東京府に出した鳥島の拝借願には、捕獲事業には触れずに別の開拓実績を強調、「皇国」拡大のための植民と、漂着民救済という二つの大義名分を掲げる。しかし実際には、玉置らはアホウドリ捕獲後、出稼ぎ者を置き去りにしたりする。「棄民」は事業の拡大に伴い多く発生するが、彼らの地元でさえも忘れ去られてしまう。「帝国」「皇国」を用いた自己正当化は、中ノ鳥島の“発見”、やはり玉置による幻の「アベジョー島拝借願」、尖閣諸島の開拓者で藍綬褒章を下賜された古賀辰四郎の矛盾だらけの経歴と業績にも同様に見られる。

にもかかわらず、山師らの行動は大きな流れにつながる。南進論を主導したのは多く自由民権運動に挫折した民権論者であり、また1884年には天皇の海防整備の勅令が出ている。「下から」の動きとされる自由民権運動の主導者が帝国の拡大に唱和するのは、一見、彼らの信条に相反する。だが南進という文脈では、民権論者と国権が奇妙な「言説連合」⁽⁶⁾を組み、玉置らの矛盾に満ちた行動に社会的意味を付与する。一方でミッドウェー諸島など東への拡張は、時を同じくしたアメリカの太平洋進出と衝突する。同諸島で大量の鳥の死骸が発見されたことで、米国では日本人の残酷性への非難が起き、米国政府は同地域での鳥類捕獲禁止を日本政府に通達する。それは、当時米国で高まりつつあった日本人排斥運動と無関係ではなかった。このこともまたアホウドリの歴史を覆い隠し、南進の大義名分を平岡の発掘する事実とは違う姿に形成することに貢献した。疑存島が多数掲載された欧米製地図を頼りに大

(5) 矢野暢『「南進」の系譜』中公新書、1975年、48-58頁。

(6) ハヤーは、異なる動作主体がそれぞれの立ち位置から共通の「話の筋」に則り同様の言説を展開することを「社会認知的プロセスとしての言説連合(discourse coalitions)」と呼ぶ。Maarten A. Hajer, *The Politics of Environmental Discourse: Ecological Modernization and the Policy Process* (Oxford: Clarendon Press, 1995), pp. 58-68.

海に乗り出し、欧米相手に商売をすることで一攫千金を夢見た日本人の野望は、先行する米国の「知」の言説に阻まれたのである。

一方、時の経過に伴い目的も変化する。乱獲によりアホウドリの数が激減するに従い注目されたのは、鳥の糞が化石化したリン鉱だった。目的が鳥の採取からより多くの労働力と資本を必要とするリン鉱採掘へと変わったことで、行為主体は個人から大企業へと移行し、さらには海軍が登場する。その直接的なきっかけは第一次世界大戦、立役者は平岡によれば、海外経験豊富で「戦争は総力戦、軍事力は工業力」と認識する秋山真之であった(245頁)。こうして第一次世界大戦まではドイツが領有し、太平洋戦争では激戦地となったパラオ・アンガウル島のリン鉱山は、海軍直営となった。

おわりに

1941年、政府は支那事変に始まる戦争を「対米英戦争」から「大東亜戦争」とする閣議決定を行った。その理由はさておき、この名称変更が敵が誰かを曖昧にし、主戦場は太平洋よりも大陸であるとの印象を強める結果となったことは間違いない。矢野によれば、昭和に入り沈滞していた南進論は、1936年に刊行された室伏高信の『南進論』で再度脚光を浴びる。室伏は「西洋の没落」を強調、「大陸と大陸の対立」を予言した。また当初「東亜新秩序」と「南方」を併用していた政府の文書は、1940年の閣議決定を境に南方を含む概念としての「大東亜新秩序」に統一される。そして戦後、「大東亜戦争」は「太平洋戦争」となり、「南洋」は「東南アジア」などの地域に解体された⁽⁷⁾。その変化は明治以降、西洋という他者を強く意識しつつ地理的条件の中に自己を探し求めた日本の葛藤を示し、「可能条件」としての海、あるいはそのメタファーとしての「南洋」はフィルムのポジとネガのごとく、時に大陸を浮き上がらせて日本を極東に配置し、時にそれ自体を強調して日本人を西端に据え、それぞれ違う可能性に満ちた「地理」を眼前に提示してみせたのではなかったか。

だが、日本人に無限の可能性を提示しているように見えた東に広がる海は、実際には、まさに玉置たち冒険者を導いたのが西欧製地図であったことが象徴的に示すように、日本人にデカルト的視点を許す真っさらな空間ではなかった。言い換えれば、高山の言う「精神の自発性」は、地理だけでなく先駆者の存在によっても規定されていった。平岡は本書の冒頭、地理事象は「①刺激(情報)→②人間の行為目的・動機→③判断・行動→④結果・地表に投影」という流れで形成される」としている(4頁)。付け加えるならば、日本人にとっての「新たな地理」としての南洋は、玉置ら山師たちの目的、行動や南進論者の言説のみならず、対峙する西洋の行動と言説も加わり重層的に形成され、さらにそれが新たな情報と視点を生み、行為目的そのものを変質させ、地理的認識を歴史的に形成してきたのである。

海が、政治の場として注目されている。安倍晋三首相は2013年2月の施政方針演説で、日

(7) 矢野『「南進」の系譜』(前注5参照)、6-7、156-157頁。

本を「アジア最大の海洋民主主義国家」、米国を「世界最大の海洋国家」と位置づけ、両者のパートナーシップを「理の当然」と主張した⁽⁸⁾。これは、本書にも登場する島々をめぐる一連の紛争はもちろん、海洋資源をめぐる近年の発展と無関係ではない。今後、海は我々にどんな可能性(あるいは限界)を示すのか。平岡の緻密な研究は、それを考える手がかりを与えてくれる。

(8) 第183回国会における安倍内閣総理大臣施政方針演説案。